

合唱+ジャズ=楽しい!

異色のコラボに酔った時

2010年7月25日、盛夏の昼下がり、30名余の合唱団員と500余名の聴衆は、ひとつの空間に溢れる「音楽」に酔いしれた。

それは、クラシックやジャズといったジャンルを超越した未体験の「音」であり、合唱と呼ぶには贅沢すぎる「音楽」であった。

その音を共有したホール中の人間は、その時を慈しんだ。

遡ること2年、私たち合唱団イクトゥスの団員は、指揮者の高橋英男先生から1冊の楽譜を提示された。

これが今回演奏した、スウェーデンの作曲家でジャズピアニストでもあるNils Lindberg (ニルス・リンドベリ) 作曲・編曲「Höga Visan (雅歌)」であり、合唱とジャズのコラボレーションを前提に書かれた楽譜であった。

ジャズは、基本となるメロディを残しながらも、プレイヤーの感性により即興(アドリブ)で音楽を作り上げることが求められるも

のであり、これに対し合唱に求められるものは、合唱団員による統一性であり、作曲者の曲の解釈をいかに忠実に再現するかである。

このように対極にある合唱とジャズが一曲の中で競演する姿を具体的に想像することは困難であった。実際にジャズトリオとのリハーサルは、本番前日のみと、私たちには最終形が見えない不安が期待を上回る状態だった。

そして迎えた本番前日のリハーサル、ジャズトリオとの練習開始後、すぐにその不安は快感へと変わり、私たちは本番での成功を確信した。

ジャズトリオの面々から放たれる音は、ジャズや合唱といった括りに捕われない「音楽」そのものであり、彼らの音楽を楽しむという姿に満ち溢れた音であった。私たちは一瞬にして音楽を楽しむ姿に感化され、一瞬一瞬に変化する音を楽しみながら歌った。

私たちはジャズトリオと共有する時を楽しみ、その瞬間を脳裏に

焼き付けたのだった。

最後に、私たちにジャンルを超えて音楽を楽しむ姿を教えてください、大原保人ジャズトリオの皆様がこの場を借りてお礼を申し上げます。

そして「もう一度競演したい!」と伝えたい。

(合唱団イクトゥス 児玉 淳)